

社会復帰へ支援模索

交通事故や病気によって脳に損傷を受けた影響で、物覚えが悪くなる、急に怒り出すなどの症状に悩まされる高次脳機能障害。社会生活への適応が難しくなる患者を支援する中四国地方で初めての拠点病院として、昨年5月に「高次脳機能センター」が東広島市に開設し、1年半が過ぎた。患者には再就職を目指す若い世代が多く、同センターと就労支援機関との連携やNPO法人による独自の作業所の開設など、社会復帰を支援する仕組みづくりが始まっている。

(福田隆弥)

障害伝え 就労機関と連携



老人ホームのフロアを使い、心理士(右端)らの指導を受けながら、2グループに分かれて訓練するサポートネットひろしまのメンバー＝広島市佐伯区観音台3丁目

「自分が変わったことを家族や友人に知られたくなかった」。東北に住む男性(25)は高次脳機能障害になり、自分では気付かないうちに、人がやることに文句を言ったり、聞く耳をもたなかったりして、他者とコミュニケーションが取れなくなると気付いた際、気持ちをこう打ち明けた。

05年12月末、雪の降る日だった。仕事を終え、車を運転して帰宅中に接触事故に遭い、足の骨が折れると共に頭部を強く打った。約1週間で意識が戻ったが、物事がうまく記憶できず、翌年の1月中旬に高次脳機能障害とわかった。

「ひと言」「見えない障害」とも呼ばれる高次脳機能障害への支援は、端緒についたばかり。県内でも相談できる窓口が増えてきたが、専門医でさえまだ少ない。企業側に症状への理解がなければ、仮に就職しても孤立して長続きはしない。「多くの人に理解してもらいたい」と願う患者や家族の切なる思いに、これからは耳を傾けていくことが必要だ。

事故から約8カ月で仕事に復帰したが、社内でコミュニケーションがとれず、1人の世界にこもる時が多くなった。男性は「作業療法士に毎日の

高次脳機能障害は、脳卒中や脳梗塞などの脳血管障害や、事故による脳外傷などによる脳の損傷が原因。記憶障害や感情が不安定になるほか、疲れやすい▽集中力がない▽などの症状がみられる。県内では、高次脳機能センター以外にも、廿日市記念病院(三次市)、尾道市公立みつぎ総合病院、脳神経センター大田記念病院(福山市)の4機関が、5月からそれぞれ相談窓口を設けている。

町田口)内で患者への診療や訓練を続け、06年5月に高次脳機能センターとして正式に開設された。昨年度の新規受診者は220人。07年度も11月末までに121人が受診した。専門医による診断のほか、リハビリのスタッフや心理士など約10人を交えて、就労に向けた訓練もしている。だが、復職するのは難しいケースも多い。高次脳機能センターの丸石正治センター長(脳神経外科)によると、同じ程度の症状で

も、再就職の成否は職場の理解の有無や職種などに左右されるといふ。同センターは今年度、国の委託で県が運営する広島障害者職業能力開発校に本格的な就労支援を求めた。丸石センター長は「医療機関だけでは限界がある。(就労支援機関には)本人に合う会社をマッチングするノウハウがある」と説明する。今年度は同センターからの推薦を受けた患者が週3、4日、計240時間のパソコン事務やビジネスマナーを学ぶ訓練を

「回復への中継地点に」

患者や家族からリハビリ作業所開く

患者やその家族も独自に就労支援の方法を模索し始めた。広島市佐伯区の有料老人ホームの一角。11月末、患者や家族でつくった「高次脳機能障害サポートネットひろしま」のメンバーの患者がトイレやフロアを清掃していた。実生活で困らないよう、マニュアル通りに掃除するのにも訓練の目標だ。

訓練は4、5人の集団である。あるグループは1週間、身近に起こったことをメモを見ながら思い出して発表した。記憶を呼び戻して自己表現する訓練だ。別のグループは、多くの数字から同じ数字を抜き出す作業で集中力を養う。01年に戻れない現実、浜田さん

04年1月に「患者の居場所作り」として、この老人ホームに作業所を開設し、今年4月からはNPO法人として運営を始めた。医療機関を退院

浜田さんの次女は短大1年生だった93年にバイク事故で高次脳機能障害を負った。短大を退学し、自宅にひきこもった。いったん就職したが長く続かず、約2カ月で退職した。次女が医療機関を退院しても社会に点になれば」と話す。

広島、東広島両市内で始めた。センター側からは各患者の障害の特徴を同校側に伝え、連携をとった。9月までの前期に9人が受講し、結婚を理由に就職しなかった1人を除き8人が復職を含めて就職が決まった。同校の堀川晴二訓練課長は「二人でも多く就職して企業に認められることで、高次脳機能障害について理解してもらいたい」と話す。